

インサイト: 教師のマインドセット変革をどうサポートするか

2023年7月12日

これまで受け継がれてきたような産業時代然としたの教育や学習のパラダイムでは、変化し続ける困難な未来に向けて子どもたちを育てていくことはできない。今、そしてこれからの世界では、生徒たちの協力性や高い意識、クリエイティブかつクリティカルな問題解決能力をばくむことが必要とされる。にもかかわらず、世界中のいたるところで、そのような資質を育てるところかむしろ阻害するような教育や学習のモデルを目にする。

同時に、変革への大きな希望もある。「変革を起こすクラスルーム」に関して私たちが世界中で実施している共同研究からは、教育と学びに関する力強い変化の地図をみてとることができる。そこでは、教師と生徒がともに学び、成長し、幸福感やつながり、気づき、主体性、達成感を高めていくような教育が広まりつつあることがわかる。

変革的な教育の新しい地図から見えてくるもっとも印象的な要素の一つが、教師のマインドセットや視点、そして「レンズ」が、いかに重要な役割を果たすか、ということである。生徒をリーダーとして成長させることにコミットすれば、その「目的」が私たちの視点やマインドセットを変え、その「新たな視点とマインドセット」が私たちの「行動」を変えるのだ。

私たちのマインドセットは、経験や世界観によって形成される。つまりマインドセットは、私たちが人生経験を通して身につけた信念、価値観、世界の仕組みに関するそれぞれの思い込みが組み合わさってできている。人は自分のマインドセットがどのようなものか意識していないことが多いが、その行動のかなりの部分はマインドセットによって突き動かされている。そのため、継続した行動の変化を生み出すためには、行動の裏にあるマインドセットを変える必要があるのだ。

以下に、変革的な教育と相関関係があることがわかっているいくつかのマインドセットと、教師がそのマインドセットに向かってシフトするのをサポートする方法について、これまでにわかっていることをまとめた。

1. 変革的な教師が、生徒、教師としての自分自身の役割、地域社会、そして私たち全員が直面する課題をどのようにとらえ、どのように意味づけしているのかについては、明確なパターンがみてとれる。

ネットワーク全体の「強力なクラスルーム」に関する共同調査では、そのようなクラスルームを率いる教師の考え方や「レンズ」に、次のような共通点があることがわかっている。

- 生徒をリーダーとしてみている。教師たちは、生徒を知識で満たすべき「器」としてではなく、自分の人生とそれを取り巻く世界を形づくる能力を備えた、全体的で知的な人間としてみている。
- 教師は学習者だと考えている。教師としての自分を、生徒が必要とする知識やスキルの唯一の供給源としてではなく、好奇心と謙虚さ、クリエイティビティをもって課題に対応する、生涯学習者としてみている。
- 地域社会を力としてとらえている。地域社会を困難な課題や未解決のニーズを抱えた場所としてではなく、力と知恵の源としてとらえており、持続的な変革を実現するためには、生徒や家族、ほかの教育者とのあいだに真のパートナーシップを気づく必要があると認識している。
- 自分の仕事を全体の一部としてとらえている。生徒のポテンシャルを阻害している不平等の根本的な原因、つまり生徒の周囲にある制度的な障壁や、彼ら自身の中にある制約的な信念に立ち向かう役割として自分の仕事をとらえており、そのような不平等に適応するために生徒にいつそう努力させることが自分の仕事だとは考えない。

このような「レンズの転換」(「アンラーニング」ともいう)が、私たちが「マインドセット」とよぶ信念、価値観、思い込みの集合体(高い期待値、成長マインドセット、自己解決力など)において、きわめて重要であることがわかってきている。

2. マインドセット、視点、「レンズ」によって、教室での日々の行動が変わる。

このようなレンズとマインドセットの転換は、教師が教育における複雑でダイナミックな課題に対応し、目的と行動のあいだのずれに気づき、生徒や自分自身、地域社会、仕事について、自分でも気づいていないような思い込みを表面化させるうえで助けになる。

- 生徒をリーダーとしてみている教師は、自分のことを唯一の専門家としてみるのではなく、たとえば生徒が互いに学び合えるような積極的なディベートの場を(たとえそのような方法を教授法として習ったことがなくても)設けたりする。
- 自分を学習者としてみている教師は、たとえば授業がうまくいかないときに、授業を中断して、問題点はなにか生徒に恐れずに尋ねたりすることで、生徒自身にもはぐくんでほしい反省的リーダーシップの模範を示すことが(たとえそのような方法のトレーニングを受けていなくても)できる。
- 地域社会を力としてみる教師は、たとえば生徒の目標について自分一人で考えるのではなく、保護者を巻き込んで共同で考えたり(大学の講義では、生徒の目標を教師が一人で設定することが推奨されていたとしても)する。
- 自分の仕事を全体の一部としてとらえている教師は、たとえば、ある生徒が授業を妨害するような場合に、すぐに結論に飛びつくのではなく、生徒の家庭環境でなにが起きているかのかについてより深く聞き取りをしたり(その子どもがもともと学校でうまくやれない性格なのだと決めつける同僚がまわりをいたとしても)する。

3. マインドセットの変革を中心とした教師の能力開発は可能である。

教師として向上するためには、新しいスキルや行動を実践することが必要な場合がある。だが一方で、みずからの根底を覆すような経験をして振り返りを行うことで、自分の生徒と自分自身、地域社会、教師という職業について、マインドセットと視点を転換して、新しいスキルを身につける真のポテンシャルが開花することもある。

教師のマインドセットの変革を、次のような方法で手助けすることができる。

- 視野を広げる。マインドセットが経験を通してつちかわれるのであれば、新しいマインドセットを身につけるには、新しい経験が必要だ、ということになる。これは、実際の経験(初めての場所に行くなど)を意味することもあるが、新しいアプローチや異なるアプローチなどについて本を読んだり、視点が異なる人の経験談や信念に耳を傾けることなども含まれる。このような経験は、それまで持っていた視点を揺り動かし、混乱を感じたり、不快に感じることもあるため、「自分の根底が覆されるような経験」としてとらえられることが多い。
- 新たな考え方について振り返る。視野を広げる際には、「振り返り」と「意味付け」を同時に行うことが重要である。振り返りをしないと、新しく触れた考え方が自分自身の考えにどのように合致するのか、そしてその結果として自分の考えを変えたいと思うか否かについて、分析し、消化する機会が失われてしまう。
- 無意識に感じていることを意識化する。マインドセットを転換するためには、まずはそれまで持っていたマインドセットを掘り起こす必要がある。振り返りのための挑発的な質問が、無意識のマインドセットを明らかにするのに役立つ。
- 現在のマインドセットを検証する。現在のマインドセットを把握できたら、それを形作った経験や、それが今も自分のためになっているかどうかを考えてみることに役立つ。
- 新しいマインドセットを言語化する。無意識のマインドセットを浮かび上がらせるのと同じくらい大切なのが、新しい(あるいは生まれつつある、進化中の)マインドセットを明確に言葉にすることである。振り返りと同じ

く、新しいマインドセットを言語化する時間を取らないと、自分の中であいまいなままになってしまい、新しい行動やアクションの原動力になりにくくなる。ここには、新しい考え方を言葉にして書き出すことや、誰かに話すことが含まれる。

- 新しい考え方を実践し、強化する。私たちのマインドセットは、世界での経験にもとづいて醸成される。そのため、大人である私たちが持っているマインドセットは、何十年もかけて強化されてきたものであることが多い。新しい経験にもとづいて、新しい考え方や信念を作り上げていく場合、定期的にそれを実践して接していないと、すでに自分に深く染み付いている古いほうの世界観にすぐに戻ってしまいやすい。新しいマインドセットを完全に消化し自分のものにするためには、新たな考え方を強化する、新たなシステムが必要となることが多い。たとえば、新しい仲間のグループや、ソーシャルメディアでのつながりなど、古い考え方に対抗し、新たなマインドセットをサポートする手助けになるような外部からの影響などがこれに含まれる。

マインドセットを転換させる学習経験には、時間、信頼、人間関係、実践を振り返るスペース、目的の明確化、実践の繰り返しが必要である。

このプロセスをサポートする人は、教師がマインドセットを変化させていく場を効果的に実現できるように、批判的にならず、好奇心を持ち、思いやりと勇気を持って臨くことが必要となる。

もっと詳しく

レンズが変わると私たちの行動がどのように変化するのか、また、レンズを変える上で役に立つ振り返りのためのツールについて知りたい場合は、さまざまなレンズについて記載されたTACLの電子書籍のレンズに関する章が両面印刷できるようにまとめられた[こちらのリンク](#)を参照のこと。